

一八八三年六月八日(金)

タクール、聖ラーマクリシユナ、ドツキネーシヨル南神寺院において

——ラカール、ラーム、ケダル、ターラク、校長等、信者たちと共に

ドツキネーシヨル南神寺院において——タクールの御足礼拝

タクール、聖ラーマクリシユナは今日、夕拝の献灯チャマラの後、カーリー堂の祭壇の前に立ち、神像を見ながら、しばらくの間、チャマラ私子で風を送っておられた。(訳註、チャマラーヤクの尻毛などで作られた扇。日本の禪宗が使う私子はっすと同様のもの)

暑い夏の日。今日は金曜日でジョイスト白分三日、一八八三年六月八日である。日が落ちてから、カルカッタから、ラーム、ケダル(チャトジェー)、ターラクたちが、タクールに差し上げるための花や菓子を持っていっしょに馬車でやってきた。

ケダル氏は年のころ五十才位である。非常に優れた信仰者で、神の話となると、すぐに涙が出てくる! はじめのころブラフマ協会に出入りして、その後もカルタバジャ(ヴィシユヌ派の二宗団)、ナヴァラシツクはじめ、いくつかの宗派に属していたが、最後に、タクール、聖ラーマクリシユナあおを師と仰

いでおすがりしている。政府の主計局に勤める役人である。カンチラパラに近いハリサハール村の出身である。

ターラク氏は二十四才。結婚したが、まもなく妻と死別した。バラサット村の出身。彼の父親は大そう霊的にすぐれた人物で、いままで何度もタクール、聖ラーマクリシュナを訪れている。ターラクの母親が亡くなってから、彼の父は二度目の妻をめとっていた。

ターラクはラームの家に始終出入りしている。ラームとニティヤゴパールと三人連れだつてタクルのところを訪れていた。現在、ある会社に勤めているが、世間のことには、まったく無関心である。

タクール、聖ラーマクリシュナはカーリー堂から出るため、大実母に身体を真つ直ぐに投げ出しての礼拝(シャスタンガ礼拝<sup>フアラム</sup>)をなすつた。外に出てご覧になると、そこにラーム、校長、ケダル、ターラクをはじめとする信者たちが立っていた。(訳註、シャスタンガ礼拝<sup>フアラム</sup>——体の八つの箇所＝頭、目、口、胸、へそ、手、膝足を地につける礼拝。つまり全身を投げだしてする最高の礼拝)

〔ターラクへの愛情——ケダルと女と金〕

タクールは、ターラクの頸<sup>き</sup>に手をふれて信愛の情を示された。彼を見て大そうお喜びになつたのである。

タクールは前三昧状態で自室の床の上にお坐りになつてゐる。お足を二本とも伸ばしたままだ。ラームとケダルは、様々な花や花輪でタクールのお足を飾つた。タクールはそのまま三昧に入られた!

ケダルは、ナヴァラシックのやり方で礼拝している。タクルの足の親指を握っているのだ。そこから霊の力が得られるということなのだろう。タクルはやがて、いくらか平常の意識に戻られておっしゃる——「大実母よ、親指をつかまれて、わたしは何をしたらいだろう！」ケダルはうやうやしく手を組んで坐った。(訳註、ナヴァラシック——風変わりな修行を行う宗派)

聖ラーマクリシュナはケダルに向かつて、まだ恍惚とした様子でおっしゃった。

「女と金に心が惹かれて——私はそんなものに全く気がない、などと口先で言っただけじゃ何にもならないよ。前進だ。白檀の木の向こうにまだまだあるんだよ——銀の山、金の山、ダイヤの山。ちよつと目が覚めたからつて、すべてがわかつたなんて思つちやいけないよ！」

タクルは再び大実母と話をはじめられた——「大実母、これ(ケダル)をのけておくれ」

ケダルは喉がカラカラになったような様子でラームに訊いた。「タクルは何ておっしゃった？」

〔神の化身と伴侶〕

ラカールを見て、タクルは再び前三昧状態になられた。そして、ラカールの名を呼んでおっしゃる——

「わたしはだいぶ前から此処にきている！——おまえ、いつ来た？」

自分は神の化身。そして、ラカールは伴侶——身内の一人である、ということタクルは暗示されたのであろうか？